

「日本語教育実践研究（1）」

池上 摩希子

要 旨

「日本語教育実践研究（1）」（以下、「実践研究（1）」）では「自分で創って自分で動かす教室「にほんご わせだの森」」として、対話を中心とした活動を行っている。本稿では2020年度春学期、コロナ禍によりオンラインでの実施となった「実践研究（1）」の授業と実践を報告し、実践を振り返る。

キーワード

対話 「場」の移行 多層性 複層性

1. はじめに

「日本語教育実践研究」科目は「実践についての授業」の時間と「実習としての実践」の時間で構成される。「実践研究（1）」では、前者（授業）は教員と受講生が後者（実践）について対話を重ね、実践では参加者（いわゆる「学習者」）を募って対話による活動を行う。教室に集まり、グループでの話し合いを中心としていた授業と実践は、全てオンラインによる同期型（リアルタイム・セッション）で行われた。本稿は、そこで起きたことを報告し、特に実践について、多層性と複層性というキーワードから振り返る。

2. 「実践研究（1）」の概要

2.1 授業の目標と内容—対話中心の協議の場—

教育と学習におけるパラダイムシフトにより、日本語教育の領域でも「関係性の固定化の排除」「対話による相互理解」等が目指されるようになった。こうした理念を理念のままにせず、実践として行うことは可能か。「実践研究（1）」では、実習をするための教室を創るところから始める。授業ではまず教員が受講生に「日本語の教室」という場とは何か、そこで行う「日本語教育」とは何かについて問いかけ、対話を中心に進められる。以下を軸に、実践の方法について話し合い、実践から省察を経て再度、話し合うことを繰り返す。

- 1) 自分の持つ教育理念に基づいて、自分の考える「教室」を創ること
 - 2) コースデザインの基本的な流れを押さえて、上記を実施すること
 - 3) 上記を実施することで、自分の考える「日本語教育」を具現化する力を伸ばすこと
- 学期によって受講生が創る教室は異なるが、教室を「にほんご わせだの森」（以下、「わせだの森」と称し、受講生が主体となって運営することは共通している。受講生は教室

をデザインし、目標を立てて活動を実施し、評価とフィードバックを行う力を身につける。

15週のシラバスのプロトタイプは図1のようなものである。ここには表れていないが、受講生のみでの打ち合わせ、実践前のリハーサル、実践後の振り返りが必ず行われる。振り返りは授業の一環となる重要な時間で、教員も参加し記録を残している。

第1回	ガイダンス
第2回	実践の準備・教室デザイン（目標設定、環境作り等）
第3回	実践の準備・教室デザイン（環境作り、学習者の募集準備等）
第4回	実践の準備・教室デザイン（学習者の募集等）
第5回～第14回	今週の実践の振り返りと次週の実践の準備
第15回	全体の振り返り

図1 シラバス（プロトタイプ）

2.2 実践の枠組み—受講生が創る対話の場—

図1「第5回～第14回」にある「今週の実践」に相当するのが「わせだの森」の活動で、授業とは別の曜日時限に行われる。曜日、時間帯、回数、参加人数等は期によって異なるものとなる。これまでは土曜の午後や平日の6限に7～10回行う例が多かった。参加者の属性やレベルに条件を設けることはあまりなく、成人も年少者も含む地域の人々、留学生、日本語学校の学生、研究科修士生など、毎回、多様な属性をもつ人々が参加している。

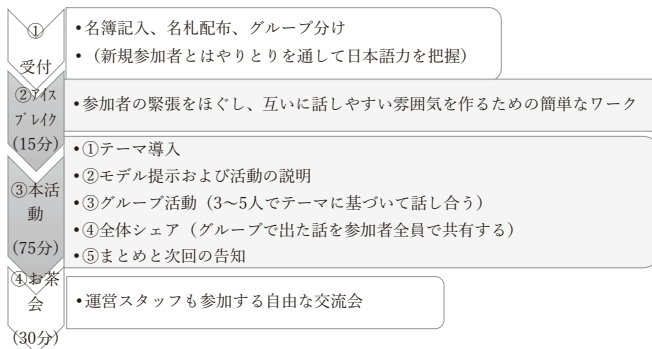


図2 活動の基本的な流れ／対面時（90分）

池上・い・小島（2017）p.166より

「わせだの森」の活動の基本的な流れは図2のようなものである。開講時からの試行錯誤を経て、およそこのような型になってきている。各学期で異なりはあるものの、対話による活動を中心に進められている。具体的な活動内容はホームページ1を参照されたい。

3. オンライン化に向けての準備と懸念

3.1 基本方針—「場」をオンラインへ移行する—

授業も「わせだの森」の実践もすべてオンラインで実施することとなったが、2でも述

べた基本方針に変更は加えなかった。協議の「場」(=授業)、教室という「場」(=実践)を同期型オンラインで行うことで、科目の目的に沿った実施が可能であると考えたからである。学事暦が変更になり、全12週となった2020年春学期のシラバスを表1で示す。「実践日程」は実際に活動を実施した日程と活動のテーマを追記したものである。

表1 シラバス (2020年度春学期)

日付	授業内容		実践日程【活動テーマ】
0	開講前	連絡をする、オンラインの操作を試す 等	* 5 / 2 (プレ)
1	5 / 12	状況分析①	
2	5 / 19	状況分析②	
3	5 / 26	目標設定①	
4	6 / 2	目標設定②	① 6 / 6 ; おうち時間とそのあと
5	6 / 9	実施計画とFB①	
6	6 / 16	実施計画とFB②	① 6 / 20 ; おうち時間とそのあと
7	6 / 23	実施計画とFB③	② 6 / 27 ; 自分と違う! そのわけは?
8	6 / 30	実施計画とFB④	③ 7 / 4 ; どうしてその名前?
9	7 / 7	実施計画とFB⑤	④ 7 / 11 ; 近所の好きなどところ
10	7 / 14	実施計画とFB⑥	⑤ 7 / 18 ; 日本語学習で難しいところ
11	7 / 21	実施計画とFB⑦	⑥ 7 / 26 ; メッセージを書こう
12	7 / 28	FBとまとめ	今学期の実践について、まとめる

授業も「わせたの森」も、Zoomを用いて同期型で進めた。受講生間での打ち合わせや振り返りも同様である。「わせたの森」については、外部から参加者を募ることから学内のシステムは利用できない。検討の結果、利便性からZoomを使用することとした。

オンラインでの授業は、教員も受講生も環境と操作に慣れるところから始まった。毎回、授業で使用する資料は事前に、協議した内容や振り返り記録は事後にWaseda Moodleにアップした。資料は授業前に読んでおく。授業では画面で共有しながら話し合う。そして、その場で発言内容を直接タイプして可視化する。それをまた読んで考えておく。この一連の流れにより、オンラインという場での対話の内容を整理し、共有を図ることができた。

3.2 懸念事項—オンライン空間の「場」を整える—

その一方で、オンライン化に対する懸念もあった。実践の場について言えば、受講生は対話中心の活動をオンラインで実施することに関してイメージを作り、Zoomの操作に慣れる必要があった。そこで、今期はリハーサルに相当する回を置いた。表1の「実践日程」にある「*5/2 (プレ)」と「①6/6」である。「*5/2 (プレ)」はこれまでに「実践研究 (1)」を履修した院生たちが開講前に実施した。「①6/6」は、開講後に今期の受講生主体で研究科の在籍生に声をかけて実施した。

もう一点、セキュリティの問題を考慮した。対面時も広報をして参加者を募っていた

が、人数制限は設けていなかった。受付を設け趣旨等を簡単に説明した後、その日来た人は全て受け入れていた。しかし、オンラインの場合は、参加者の実体が見えない。ウェブ会議システムに第三者が「乱入」という事例も聞かれ、心配された。検討の結果、「定員を設けて申し込み制にする」「前日にメールでZoomのURLを送付する」とした。

4. オンライン「わせだの森」で起きたこと

4.1 オンラインでの枠組み

「2」で示した流れは対面時と同様であるが、オンラインでの対話活動として全体構成をシンプルにしたことが変更点としてあげられる。活動の基本的な流れを図3として示す。

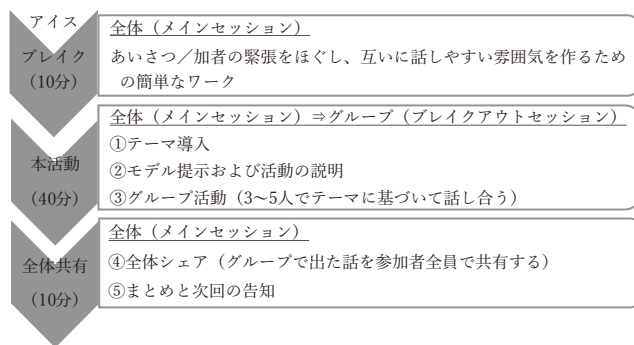


図3 活動の基本的な流れ／オンライン (60分)

対面時の「受付」と「お茶会」をカットし、活動時間も短縮した。初対面の参加者も想定され、画面を通しての対話では集中力が続かないと判断したためである。一方で、オンラインの利点を生かし、空間的制限を越えて「世界中の日本語で話したい人」を対象とした。各地の時差を考慮し、少しでも参加し易くしたいと考え、土曜の12時から13時と設定した。実際に、首都圏外や日本以外の地域からの参加者も見られた。広報はSNS、メール、リスト、経験者の紹介も利用したが、SNS中心としたのも今期の特徴である。

4.2 振り返り—多層性と複層性—

ここで、オンラインでの対話活動で起きたことを振り返ってみたい。毎回、開始時刻になると、参加者が次々と入室してくる。受講生たちと簡単な挨拶を交わした後は、ほとんどの人が静かに待っている。対面の場合では、受講生が声をかけたり知り合い同士で話したりして開始までの時間が温まっていた。画面上であっても声をかけることはできる。しかし、画面上には複数の人が映っていても、見えるのは「問いかける人」と「答える人」の様子のみとなる。声の全てが全員に届くため、同時に別の会話が(おしゃべりも)成立しない。二次元空間を三次元へと変更することはできないが、構造に多層性を持たせることはできる。ほとんどメインセッションとブレイクアウトセッションの区分だけで捉えられていた活動の構造に、回を追うと次のような小さな層を入れるようになっていった。

- ・開室した最初の5分で参加者に音声や画像の調子はどうか等々、確認する。
- ・5～10分早く開室し、活動の前に声をかけたりおしゃべりしたりする。
- ・リアクション機能やチャットを使う練習をして、問いかけに反応して繋がってもらう。

このように構造に段階をつけて多層性を意識すると同時に、複層性にも留意するようになった。ファシリテーターが活動の「説明」をしてしまい、つい冗長になることはよくある。だれに向かっていることばなのかがわかりづらいと、モノログになる。静かな参加者がどんな様子であるか、空間を共有していないため、周辺情報から読み取るとは対面時よりも難しい。だからこそ、オンラインでは一層、相手の様子を観て問いかけ、返ってくることを聴く必要がある。この点について、受講生たちとは「モノログではなくダイアログを」として毎回の振り返りで取り上げてきたが、以下のような変化が見られた。

- ・「問いかけたつもりが、自分だけが喋っていた感じがある」と気づいていた。
- ・「今日はダイアログになっていた」などの相互評価が見られるようになっていった。
- ・ファシリテーター以外も「もっと問いかければよかった」と役割を意識していた。
- ・「話を振れる参加者に問いかけることもできたか」と留意点が拡張していった。

こうした気づきは随所に見られ、受講生の次の教育実践に繋がっていくと感じられた。

5. おわりに

「実践研究(1)」は、指導技術のみならず多様性に向き合える力の養成を目指している。普段、教室で円座し多様なやりとりが交わされる「わせだの森」は、オンラインで何ができるのか。イメージができない、ICTは得意ではないという声もあった。しかし、「わせだの森」は多様な参加者がいられる場として創るのであり、創り手も当然、参加者に含まれる。集まった人それぞれが「できること」をする「場」とすればよいのではないか。

日本語教育はこれまでも、変化する社会状況の下、制限のある条件と環境に対応しながら発展してきた。オンライン化を余儀なくされた現況もその一局面であろう。それを枷としてではなく可能性と捉え、次の展開を目指したいと考える。

注

- 1 <http://www.gsjal.jp/ikegami/mori.html> (2020年8月10日取得)

参考文献

- 池上摩希子・いじょんみ・小島佳子(2017)「『教える／教えられる』関係を越える教室」川上郁雄(編)『公共日本語教育学—社会をつくる日本語教育』くろしお出版、pp.165-170
- 田島充士(2019)『ダイアログのことばとモノログのことば—ヤクピンスキー論から読み解くバフチンの対話理論—』福村出版

(いけがみ まきこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科)